アルバータ州の
石油精製工場群。

例だ。しかし他の産業もそうだが、カナダの鉱山・精錬業はかなりの部分(六割)が外国企業の支配下にある。とくに鉱山部門は、精錬部門より外資の占める割合がはるかに大きい。

鉱物資源は再生できない資源であるから、国内産鉱物を基礎とした大規模な加工業および製造業の育成に重点を置くことによって自国の優位を高めていこう、というのが、カナダの方針である。成熟した産業経済と進んだ技術ノウハウを背景に、鉱産物を輸出する前にできるだけ加工するための産業開発に重点が置かれている。

昨年は、鉱山部門も鉱物加工部門も、営業収入および純益の点で、七〇年代のうちでも上々の業績を示した。七九年の生産高は二百六十億ドルと、これまでの最高を記録した。

金属・鉱物部門(とくに金属)の最大の貿易相手国は依然として米国である。しかし、日本とカナダとの関係も近年はとみに緊密化の度合を増してきた。一九七九年における金属・鉱物の対日輸出高は十五億ドルをこえ、同部門の輸出額全体の四割以上を占めた。鉱石および精鉱の比重が大きかった。カナダではエネルギー・コストが安いため、金属に関するカナダの国際競争力が今後とも大きく伸びることははっきりしている。事実、ここ数年、アルミや鉄合金といったエネルギー多消費型の金属について、日本の輸入は急速にふえてきている。

森林資源

いくらでも再生可能な資源である木材に恵まれたカナダは、世界有数の林産物輸出国である。カナダ国内にある一億七千七百万ヘクタールの商業林は、世界の商業林の八パーセントに相当する。一九七九年における新聞用紙、材木、パルプ、パルプ材およびその他の林産品の輸出高は、総額百十八億ドルで、国内生産高の七割にも及んだ。カナダの森林面積は陸地全体の三五パーセントを占め、そこから昨年は一億五千万立方米の材木が伐り出された。

林産物は、昔から重要な対日輸出品目である。日本の輸入は年々増え続け、一九七九年には九億ドルに上った。急激な増加を示している一例に、建築用角材がある。その一部は、最近カナダの建築技術として日本に導入され好評を得ているツーバイフォー工法で使用されている。

海外に輸出される材木

水産資源

カナダの水域は、五百年以上も前から豊かな漁場を提供してきた。カナダには、二十四万キロメートルの長い海岸線に加えて、七十五万平方キロという世界最大の内陸淡水域が存在する。東西両岸に広がる大陸棚は、適度に浅く豊かな餌場となり、また適度に低い水温が身の締まった味の良い魚を育てる。タラ、サケ、ニシン、イカ、ロブスター、サバといったよく知られたものや、そのほかの市場価値の高い魚がとれる。

カナダは、現在世界最大の水産物輸出国である。毎年ほぼ五十万トン、価格にして十四億ドルの魚が輸出される。そのうち五割は米国向けだ。米国民の口に入る魚の一五パーセント強がカナダ産である。

一九七七年一月一日、カナダは漁業資源保護管理のため、二百カイリ制に踏みきった。それに伴い、日本を含む諸外国との間に、領海内では漁獲可能量の範囲内で操業を許可するという内容の二国間協定を結んだ。国民一人当りの魚の消費量が世界一である日本は、数の子、サケ、イカを始めとする各種カナダ産水産物の、ますます重要な市場となってきている。

カナダの水産資源は、八〇年代の最も有望な産業のひとつになるといわれている。とくに従来比較的成長の遅れていた地方では、水産物加工業の発展に大きな期待をかけている所が多い。

農　業

カナダの重要な産業である農業は、高度に専門化され、最新技術を駆使し、生産性も高い。西側先進工業国の中でも、カナダのエンゲル係数は最低といっていいほど小さく、食料品が安いことを示している。また、カナダ農業の強さは、農産物貿易が毎年大幅な黒字を記録していることからも明らか。昨七九年の黒字幅は二十億ドルだった。

カナダの耕地面積は、約六千八百万ヘクタール。そのうち約四分の三がマニトバ、サスカチュワン、アルバータのいわゆる平原三州で占めている。カナダは数々の温帯産の農作物を輸出し、熱帯産のものを輸入している。各種穀類において特に強く、小麦の輸出では世界の五指に入る。酪農品、鶏卵、チキン、七面鳥、タバコも十分自給できる。

カナダ農業では近代的な最新技術をどんどん採り入れることによって、単位面積当りの必要労働力を減らしてきた。機